

安宅湊と船主たち

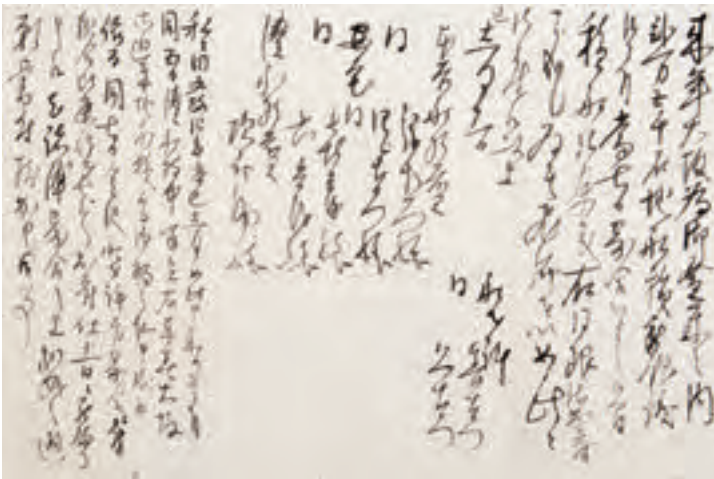
梯川^{かけはしがわ}の河口に位置する安宅湊は江戸時代初め安宅村・安宅浦とも称され、十村^{とむら}支配下で、外海網役・外海船權役等も賦課された。が、南加賀の中心小松町の外港的役割を果たし、小松町奉



船筆筒(小松市安宅町 木下健次家所蔵)

行の支配下、正徳三年(一七一三)安宅町となり、海運業などで繁栄した。出入津商品等も藩に管理されたが、船肝煎は大坂廻米積出御用の任に当った。船主たちは主に中小廻船業者で、道産物や上方の下り物を積荷とする買積船に乗り、西廻航路沿岸の湊に出入りし蝦夷^{えぞ}・大坂間を往来した。寛文七年(一六六七)三〇〇石積以上では一三〇〇石積船四郎兵衛等五名六艘があった(金沢、中山家文書「浦方御用留」)。安政五年(一八五八)一〇〇石積以上の廻船は金津屋勇蔵の六五〇石積や小松町人小杉屋六兵衛の六〇〇石積も含め一三名一七艘が、また、慶応三年(一八六七)八〇石以上では米屋半兵衛等二八名二九艘があり(「外国奉行一巻」)、これら大船主は町役や他商売も兼ね、

名実ともに当湊の経済・社会を支えた。しかし、客船帳をみると、江戸時代後



文政4年(1821)大坂廻米積請船割付寄合召封(白山市所蔵)

期四〇〇五〇家程の船主がいた。

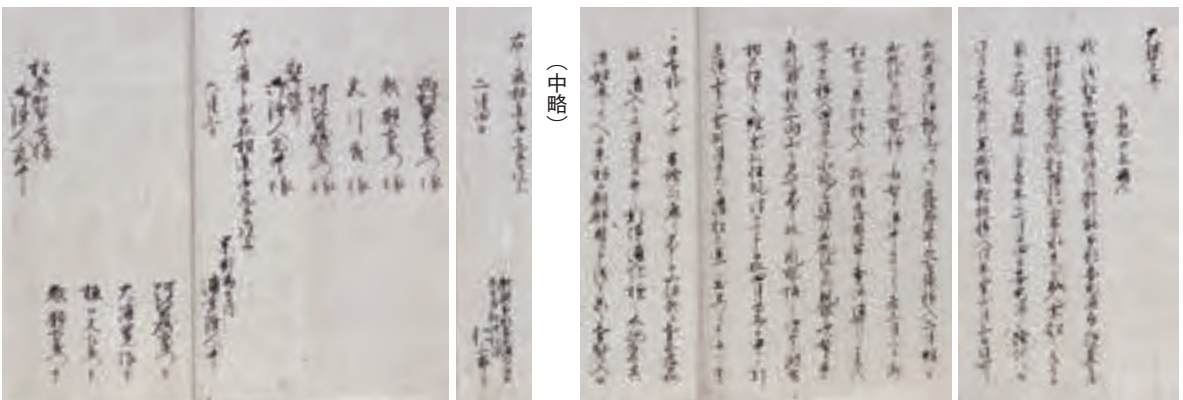
一方、海難事故も数多く、正保三年

(二六四六) 小倉船が越前崎浦で、文政七年(二八二四) 和氣屋次郎七船が出羽庄内北浜で、同十一年谷屋久七船が若狭早瀬浦で、天保九年(一八三八) 小倉屋長藏船が越前左右浦で、文久二年(一八六二) 住永丸が江差等で難破する。



木場屋伝右衛門奉納船繪馬(小松市上本折町 多太神社所蔵)

この間、天保十三年(一八四二) 与三次屋神徳丸の場合、大坂・蝦夷往来の途上、松前を出航後、朝鮮国に漂着し、およそ二か年かけ帰還した大事故であった。こうして、遠く荒波を越えて商売に励む人々の心意気、それを支える家族、航海の安全・無事と商売繁盛を切望する人々の想いが船繪馬等から読み取れる。(池田仁子)



(中略)

天保13年(1842)安宅浦与三次屋平兵衛船神徳丸朝鮮漂着に付口上覚『小松日記』46巻(小松市立図書館所蔵)